

参加者募集要項

海外事情研究所主催・高大連携事業

東京外国語大学 夏期世界史セミナー —世界史の最前線II—

東京外国語大学では、本学の世界各地域の歴史学担当スタッフによる最新の研究成果を公開するとともに、高校で世界史教育を担当する先生の方々との対話を通じて世界史教育に新たな視座を示すことを目標に、今年度も2日間のセミナーを実施します。今年は意見交換会も設けますので、その機会に日ごろの世界史教育での悩みなど一緒に考えていきましょう。皆様のご参加を心よりお待ちしております！

2010年8月3日(火)～4日(水) 東京外国語大学府中キャンパス 研究講義棟 115(予定)

プログラム

※今後の調整によって、多少、変更になる可能性もありますので、ご了承ください。

| | | | |
|-------------|-------|-------------|-----------------------------------|
| 1 日 目 | 3日(火) | 12:30～13:00 | 受付 |
| | | 13:00～13:10 | 海外事情研究所所長挨拶(吉田ゆり子) |
| | | 13:10～14:20 | 「狩猟採集社会は「文明」の呪縛から抜け出せるか」(小川英文) |
| | | 14:20～14:30 | 質疑応答 |
| | | 14:30～14:40 | 休憩 |
| | | 14:40～15:50 | 「沈黙の共同体—ハンド・サインから見る中世ヨーロッパ」(千葉敏之) |
| | | 15:50～16:00 | 質疑応答 |
| | | 16:00～16:10 | 休憩 |
| | | 16:10～17:20 | 「オスマン帝国史の描き方」(林佳世子) |
| | | 17:20～17:30 | 質疑応答 |
| | | 17:45～19:45 | 意見交換会・懇親会(学生会館ホール) |
| 2 日 目 | 4日(水) | 09:00～09:30 | 受付 |
| | | 09:30～10:40 | 「大西洋世界の成立とブラジル」(鈴木茂) |
| | | 10:40～10:50 | 質疑応答 |
| | | 10:50～11:00 | 休憩 |
| | | 11:00～12:10 | 「代表的アメリカ人、フランクリン」(金井光太郎) |
| | | 12:10～12:20 | 質疑応答 |
| | | 12:20～13:20 | 昼休み |
| | | 13:20～14:30 | 「東欧の経験した第二次世界大戦」(篠原琢) |
| | | 14:30～14:40 | 質疑応答 |
| | | 14:40～14:50 | 休憩 |
| | | 14:50～16:00 | 「多民族国家ソ連の構成原理と現実」(鈴木義一) |
| | | 16:00～16:10 | 質疑応答 |

参加条件・申込み方法等

日程 2010年8月3日(火)、4日(水)(2日間)

会場 東京外国語大学 府中キャンパス
 (東京都府中市朝日町 3-11-1)
 西武多摩川線「多磨」駅より
 徒歩5分、
 又は京王線「飛田給」よりバス

対象 高等学校、
 予備校の世界史担当教員

受付期間 2010年7月23日(金)まで

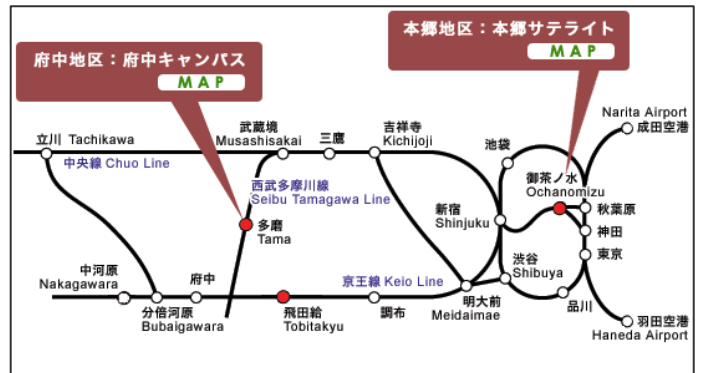
受講料 無料

懇親会 3,000円

当日受付にてお支払い下さい。

応募方法 同封しました申込書をFAXにてお送り
 ください。同じ高校で複数の方が申し込
 まれる場合は、申込書をコピーして
 ご利用ください。

なお、宿泊が必要な方は、事前に宿泊
 先を確保した上でお申し込みください。



[お申込み先]

東京外国語大学 総務企画課広報係
 〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
 TEL:042-330-5150
 FAX:042-330-5140

[お問い合わせ]

吉田ゆり子(海外事情研究所所長)
 ifa@tufs.ac.jp

[企画・運営]

東京外国語大学 海外事情研究所
<http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ifa/index.html>

プログラム1日目

「狩猟採集社会は「文明」の呪縛から抜け出せるか」小川 英文

東南アジアをフィールドとして、狩猟採集社会の考古学を行いながら、その対極にある「文明」と闘い続けてきた。国民国家成立以降、考古学は狩猟採集社会のイメージを、博物館展示やモデルなどの場で生産してきた。これらのイメージの変遷を検討すると、研究の枠組みや方法論の変化があつたにもかかわらず、現在でも考古学は狩猟採集社会を「非文明」イメージのなかに隔離してきたことが理解できる。同様なイメージ形成のあり方は、アンコール遺跡群においてもみられる。宗主国フランスのアカデミズム的関心は、社会的、文化的、経済的に「停滞した」植民地の現状ではなく、宗主国が今日的に達成しえた「輝かしい文明」と同等の価値を与えるに足る、植民地の「古代文明」にあつた。この講義では、東南アジアの発掘の歴史をたどりながら、近世、植民地時代、そして現在のアンコール遺跡群をめぐる、考古学が生産したイメージの虚構性を打破し、歴史の回復をめざす試みについて議論する。

「沈黙の共同体—ハンド・サインから見る中世ヨーロッパ」千葉 敏之

ヨハネ黙示録に描かれた天使を模倣する修道士たち。彼らが最も重視した掟は、「沈黙」であつた。この究極の理想を抱きつつも、日々の共同生活を円滑に営む必要から、修道院に固有の記号—ハンド・サインが発明された。中世ヨーロッパのキリスト教と言えば、教皇を頂点とする厳格な位階制に基づいた、権威と権力の主体としての教会組織、あるいはその末端にあつて都市や農村の平信徒たちの日々の司牧を担う小教区といった、「聖職者」(クレリクス)の世界にばかり目がいってしまう。しかし、「祈りの共同体」である修道院、とくに共通の会則と組織で結ばれた修道会の存在は、修道院と修道院、都市と都市、地域と地域を結ぶネットワークの形成を通じて、中世ヨーロッパ社会に決定的な影響力を持った。それはまさに、修道士(モナクス)の世界である。本セミナーでは、中世のハンド・サイン・レキシコンの分析から出発して、世界史のなかの修道会、修道士のあり方について考えてみたい。

「オスマン帝国史の描き方」林 佳世子

日本史でいえば鎌倉時代にはじまり、大正時代に幕を閉じるオスマン国家は、一つの国のようでありながら、実は2度の大きな変容を経ている。ひとつの王家を頂きつつ「3つの国」が続いたといつてもよいだろう。3つの国とは、創設から16世紀前半までのオスマン軍人たちの国、16世紀中葉から18世紀末までのオスマン官人たちの国、そして、近代オスマン帝国である。このうち、2つめの「官人たち」の時代は、中東やバルカン地域の次の時代(すなわち、近代)を規定したという意味で非常に重要であるにもかかわらず、これまで、あまり丁寧に説明されてこなかった。今回は、特にこの時期の社会と文化を中心に紹介し、大きく変化するオスマン帝国のあり方を考えていきたい。

プログラム 2 日目

「大西洋世界の成立とブラジル」 鈴木 茂

この報告では、世界史的な文脈の中でブラジルの歴史を考える手がかりを探りたいと考えています。「世界史的な文脈」とは、さしあたり近年わが国でも注目されるようになってきた「大西洋世界」あるいは「大西洋交易圏」という歴史の捉え方を念頭に置きます。そのうえで、大陸部の旧スペイン植民地（植民地開発のあり方全般、とくに先住民政策と土地政策と布教政策について）や旧イギリス領植民地＝アメリカ合衆国（とくに黒人奴隷制度について）からの類推では理解できない点、カリブ海地域との関係について説明する予定です。時代的には 19 世紀までを扱うこととなります。

「代表的アメリカ人、フランクリン」

金井 光太郎

B.フランクリンが代表的アメリカ人であることは異論のないところであろう。ポロから富へ、勤勉と努力によって富に至る道を実践し、貧しいリチャードから建国の父にまで上り詰めた人物である。正に、アメリカの夢を実現したのである。『自伝』はアメリカ人にとってバイブルに近いものとされた。しかし、フランクリンの実像並びに彼自身の自己イメージは、大きく食い違うものであった。王党派のイギリス帝国臣民、イギリスでの猟官運動、貴顕紳士としての社交、フランスのサロンでの人気者、宮廷外交の成功者。きわめて大きな富を築いたとはいえ、彼が大事にしたのは公共奉仕と名誉であった。建国初期のアメリカはワシントンが代表し、フランクリンは忘れ去られていった。しかし、19 世紀前半、アメリカ社会が急速な発展を始め、資本主義が勃興するにつれて、アメリカの国民性はセルフメイド・マンとされ、それを代表できる建国の父としてフランクリンが偶像となっていったのであった。

「東欧の経験した第二次世界大戦」

篠原 琢

第二次世界大戦は、長いあいだ、連合国と枢軸国、民主主義とファシズムの戦いであると語られてきた。第二次世界大戦の評価は、過剰に道徳化され、その記憶はつねに想起する者の政治的正統性と結びついていたのである。それは何よりもナチ・ドイツによるユダヤ人絶滅政策をはじめとする過酷な占領政策や軍事作戦が人道性の破局をもたらした、その圧倒的な印象によるものであった。とりわけ、第二次世界大戦がもっとも大きな破壊をもたらした東欧では、戦後、名目上、戦前からの連続性の下に諸国家が復活したので、大戦の結果は、これらの諸国が存在する正統性の前提をなしたのである。そのため、第二次世界大戦がもたらした破壊、絶滅政策や強制移住がもたらした住民構成については、批判的に語られることなく、「勝利の物語」の下に忘却された。絶滅政策の現場につくられた記念碑は、占領下の受難とそれへの抵抗を語るばかりであった。

冷戦が終結してから 20 年、東欧での第二次世界大戦の記憶は大きな修正を迫られている。忘却されたできごと、忘却されたことも忘れられていたできごとについて、公的な議論が沸き起こってきたからである。現代東欧における第二次世界大戦の記憶と評価の変化についてとりあげ、第二次世界大戦像の修正について考えるとともに、それを通じて冷戦後の東欧社会そのものの変化を跡付けてみたい。

「多民族国家ソ連の構成原理と現実」 鈴木 義一

「民族自決」は、近現代史のキーワードの 1 つである。そしてこの「民族自決」を論じる際には、無意識のうちに肯定的な価値判断が入り込みやすい。大雑把な言い方をすれば、「民族自決」を実現することは「良いこと」で、これに敵対する者は「悪者」という図式に出会うのは珍しいことではない。振り返ってみればソ連は、この「民族自決」をその重要な構成原理の 1 つにしていた。もしそうならば、200 を超える民族で構成されたソ連には民族問題は存在せず、この点に関する限りソ連は優れた国家であったのか。もしくは、「民族自決」は建前に過ぎず、ソヴィエト国家は諸民族の権利と利害を抑圧してきたのだろうか。こうした問題を、おもに中央アジア地域に即して考察してみたい。

まず、ソ連を“an affirmative action empire”と規定する Terry Martin によりながら、非同化的なソ連の民族政策の基本原則を整理し、続いてその実施過程を検証する。その中で、「民族自決」を目指す政策が必然的にはらむ矛盾とともに、近代化がもたらす宿命的变化に注目する。